

町長

ひとごと

⑦②

齊藤

讓



いま町長室で、鉢の
カトレヤが、うす紫の美
しい花を咲かせ、訪れて
来る人々の目を楽しませ
ている。私も、年の瀬の
慌ただしい中で、ほっと
一息つくとき、この花に
心を和ませてくれる。この
カトレヤは、木戸の椎名
昌範さんが、自ら育てて
咲かせたものを、持って
きて貸してくださったも
のである。椎名さんは現
在総武建設の社長として
多忙な毎日を送るかわ
らで、色々な草花を栽培
していて、折々に丹精こ
めた作品を持参してい
だいでいる。それがまた、
どれも素人づくりとは思
えない立派なものばかり
なのである。

ある時、素晴らしいエ
ビネを持ってきてくれた
ことがある。大振りの鉢
に、幾本もの黄色い花が

ておいたものであるから、
それは当然のことである。
浅ましい自分に、苦笑が湧
いてきた。同
時に、目の前
で静かに風に
揺られて咲くわ
が家のエビネ
をとっても愛お
しく思った。

凛として咲き、それは見事
なものであった。見る者誰
もが、感嘆していた。ある
人が、これは花一本で十万
円に相当するといった。一
本十万円と聞いたとたんに、
私は思わず家の庭の片
隅で、数本の花を咲かせて
いるエビネのことが頭に浮
かんた。もしかしら数十
万円といった皮算用をして、
その日は帰宅するなり、ふ
だん手入れもしたことのな
いエビネのもとへ直行した。
しかし、そこに咲いていた
花は、たしかに似たような
黄色い花ではあったが、椎
名さんのそれとは全く違っ
て、よく花屋の店先で安売
りされているものと同じで
あった。尤も、このエビネ
は、数年前にどこかかの土
産物屋の店先に一本だけ花
をつけて売れ残っていたも
のを、五百円で買ってきて、
無造作に植木の根元に植え

ておいたものであるから、
それは当然のことである。
浅ましい自分に、苦笑が湧
いてきた。同
時に、目の前
で静かに風に
揺られて咲くわ
が家のエビネ
をとっても愛お
しく思った。

と聞けば、椎
名さんは若い
頃から、華道
を勉強したり、
花づくり農業
をめざしたり
したことある
という。それが趣味の花
づくりとなって、今日まで
長く続いてきているのであ
る。どんなに遅く帰宅して
も、翌朝早くに必ず手入れ
をするのだという。頭が下
がる。毎日作業服を着て、
東奔西走している椎名さん
のことを人は「行動人間」



だという。この椎名さんの
姿からは、とうてい花づく
りのイメージは湧いてこな
い。「人は見掛けによらない」
とはよく言ったものである。
また、「忙中閑有り」とい
う言葉も、実感となって心
に響いてくる。
よく観察してみると、
忙しい忙しさと口にする人
に限って、実
はたいしたこ
とでもないの
に、物事に主
体性や情熱を
失っていて、
それに呑みこ
まれてしまっ
ている者が意
外に多い。

反対に、多
芸に秀でてい
る者や、八面
六臂の活躍を
している者は、忙しいなど
という泣き事は決して口に
は出さない。要は、時間
の有無ではなく、自分に与
えられた時間をどう活かし
ていくか、その気力の有無
である。

卓上のカトレヤは、いま
私にそう語りかけている。

▼ところで、私は今までず
っと一人の男の背中を注目
してきた。それは、千葉県知
事沼田武氏の背中である。
沼田知事は、生粋の千葉
県人で、県庁職員から、副
知事を経て知事の座に就か
れたことは、誰もが知ると
ころである。それだけに、
沼田知事のふる里千葉づく
りに賭ける情熱は、凄まじ
いばかりである。その執念
こそが、今日の躍進する千
葉県を形成してきたといっ
ても、決して過言ではある
まい。私が、沼田知事に惹
かれ、その背中を見つめて
きたのは、ただ単に知事と
しての手腕、力量からだけ
ではない。それは、むしろ
決して驚かすことのない、公
平で温かい人柄に魅せられ
たからである。私も時々沼
田知事のところへ、お願い
に伺うことがある。どんな
にお忙しい時にでも、笑顔
をもって真剣に耳を傾けて
くれる。そのやさしい気持
ちがたまらなくうれしい。
年中、分刻みのスケジュール
をこなしているのである
から、時には顔に疲労の色
が浮かんでいることもある。

「知事さん、お疲れでは
ありませんか」と気遣う
と、その度に「いやあ、
大丈夫ですよ」と笑顔が
返ってくる。
▼「君子行」という中国
の古い詩がある。中に次
の言葉がある。
周公は白屋に下り
哺を吐きて餐に及ばず
一たび沐して三たび髪
を握る
周公は、貧しい人に対し
てもへりくだり、食事を
している時に来客があれ
ば、口にふくんだ食物を
吐いて会いに出だし、髪
を洗っている時に来客が
あれば、髪を握ったまま
会いに出たという意味で
ある。

私はいま、沼田知事の
背中に、この周公の姿を
見る思いがする。
そんな後姿を見る度に、
自分も斯くあるべし、と
反省を繰返している昨今
である。
カトレヤの花ことばは
「高貴」である。